

時論

新論

理想論

建築家の悲劇—アラブ世界の都市伝説

福田 義昭

(ふくだ よしあき)

国立民族学博物館外来研究員

スルタン・ハサン学院
(左側建築物)近くから撮影した
スルタン・ハサン学院

思いもよらない報酬

エジプトの首都カイロは、いわゆる「イスラム建築」の宝庫である。私のお気に入りにはスルタン・ハサン学院だ。一四世紀、マムルーク朝時代に建てられた豪壮な宗教建造物で、カイロの南東部、サラフツティーン(サラティン)が礎を築いた城塞の西向いに、それと対峙するようにして威容を誇っている。今から七〇年ほど前にエジプトを訪れた中国史家の宮崎市定氏も「恐らく世界の石造建築の中で、指を第一に屈する傑作ではないか」と述べている。

偉大な建物には、自然と何らかの伝説が生まれてくるらしい。スルタン・ハサンは、このような傑作が二度と造られることがないようにとその建築家の腕を切り落としてしまった、という話がある。史実には反するが、少なくとも一九世紀末頃にはすでに一部で流布していたようだ。野上弥生子など戦前にカイロを訪れた幾人かの日本人旅行者も、この話を紹介している。

アラブの古伝説が元になっているのではないかと、という人もいる。イスラム以前の時代、現在のイラク南部にラフム朝というアラブ王朝があった。その国のある王が、首都の郊外にハワルナクという宮殿を建てることになる。ピザンツ出身のスイニマルという建築家がこれを請け負い、長い年月をかけて壮麗な宮殿を完成させる。しかしその後、王は彼を宮殿の上から突き落として殺してしまう。理由は三つの説がある。同様の建物を他人に建てられたくなかった、というものが一つ。もつと素晴らしい、太陽の動きに合わせて回転する建物造ることができたのに、建築家がそれをしなかったことに対する怒り、というのがふたつ目。最後に、宮殿の崩壊につながる建築上の秘

密を守るうとした、という説。

この伝説は「恩を仇で返される」という意味をもつ「スイニマルの報酬」という諺ともなり、中東一帯に流布している。しかし、これがスルタン・ハサン学院の伝説の直接的起源かどうかは定かでない。スイニマル伝説では建築家が殺されるのに対し、スルタン・ハサン学院の伝説では腕を切り落とされるだけだからだ。

じつは、この種の伝説はアラブ特有のものではない。ユーラシア大陸やアフリカ大陸に広く類話が存在する。腕が切り落とされる型も少なくない。スペインの例など、スイニマル伝説が元になったと思われるものもあるが、そうはいえないものも多い。古代インドで生まれた仏陀の前世物語集「ジャータカ」にもすでに類話が見られ、先に挙げた最初の理由により、建築家の目がえぐりとられることになっている。

エジプトに話を戻すと、より最近の建物に関しても類話が見つかる。二〇世紀初頭のカイロ近郊に、ベルギー人実業家のアンパン男爵がヘリオポリスという街を造り、そこに自分の住居を建てた。「男爵宮殿」とよばれる、この奇怪な建物にも同様の話が流布していることを街の住人から聞いたことがある。面白いことに、太陽の動きに合わせて回転する建物というモチーフのみが見られ、建築家の受難には触れない型もある。

ほとんどの類話で建築家がよ者になつている点も興味深い。ガストン・ルルーによる有名な「オペラ座の怪人」(一九一〇)の原作でも、エリックの前半身が語られるエピソードに同様の状況を見出すことができる。どうもこれらの伝説には、建築家と権力の関係だけでなく、建築家の異人性についても思考を促すところがあるように思われる。